



発行所 アシュラムセンター  
523-0894 近江八幡市中村町 567-2  
Tel 0748-33-4030  
Fax 0748-33-8856

アシュラムセンターホームページ  
www.ashramcenter.jp

編集 アシュラム誌編集委員会

振替 01050-6-53772  
アシュラムセンター

印刷 明文舎印刷商事(株)

解題

アシュラムとはインドの言葉で「退修」という意味で、スタンレー・ジョーンズ博士によって日本に紹介されたものであります。祈りの生活をもってみ前に自らを整え、今日に於ける主のご委託にこたえんというのがその願いです。

マルタとマリア、そしてラザロの家。この家には、どこか、訳ありの匂いがする。一家を切り盛りしているのは姉のマルタ。その傍らには、ただ静かに佇むマリア。そして、おそらく病弱であったのだろう、死の床に伏すラザロ。そこには父親も母親も、配偶者の姿も描かれていない。病弱な弟と寡黙な妹を抱えながら、懸命に生き、働き、主に仕えようとするマルタの姿があるのみなのだ。一年分の労働賃金にも匹敵するほど高価な香油の壺を、一瞬のうちに割ってイエスに注ぐマリア。死んで四日も経っていたにもかかわらず、主の声によって墓から呼び出されるラザロ。そんな劇的で神秘的な二人に比べると、マルタはいつも働いてるだけである。しかも、主から褒められる場面はほとんどない。けれども、その彼女こそが、イエス一行を迎え、もてなしたのである。

ここで使われている「もてなす」という言葉は、ギリシャ語の重要な言葉「ディアコニア」である。それは「奉仕」を意味する。聖書の中で繰り返し用いられ、教会の働きを表す大切な言葉である。つまり、マルタのもてなしそのものが、ディアコニア——奉仕だったのだ。しかし、そこには、報いを求めず仕える者の悲哀がある。奉仕の奥には、ときに妬みや疲れ、言葉にならない痛みが潜んでいる。つい、不平や不満が口をついて出てしまうのだ。「ほめられもせず、くにもされず、そういうものに、わたしはなり

瞑想

一行が歩いて行くうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。

主幹牧師 榎本 恵

座っているマリアを。また、そのマリアを咎めることなく、語り続ける主の姿を。「あの人は好きでやっているのだから」とでも言いたげに、何事も無い顔で飲み食いしている周囲の人々を。そして何より、誰からも評価されず、哀れで、惨めに思える自分自身の姿を。そう、彼女には、見えていた、ものである。あまりにも多くのものが見えていたのだ。

本当に大切なのは一つだけ。それは、聞くこと。しかも、主の声を聞くことである。私たちは、まず何をおいても、主の声に耳を傾けなければならぬ。見えているものに心を奪われ、それに執着する時、私たちは聞こえなくなってしまうのだ。「従う」を意味する英語 obey は、ラテン語 obedire に由来する。そこには、「耳を傾けて聞く」という意味があるという。従うとは、ただ命令に無理やり服従することではない。そうではなく、まず耳を澄まし、その声を聞くことなのだ。「実に、信仰は聞くことにより、しかもキリストの言葉を聞くことによつて始まるのです。」(ローマ10:17) 私たちの信仰も、伝道も、奉仕も、まず「聞くこと」から始まらなければならない。友よ。主の言葉を聞いた後、マルタがどうなったのか、聖書は何も語っていない。けれども私は思う。彼女もまた、そのままの自分で、「良い方」を選んだに違いない。と。私たちもまた、聞くことから始まるディアコニア(奉仕)に生きる者となるよう。

## 50周年コンサートへの 舞台裏に起きた神の奇跡②

榎戸 真弓

「神の奇跡」としての  
備えと成就

次の瞬間から起こったことは、まさに「神の奇跡」としか表現できません。通常であれば到底間に合わないような膨大な準備作業（台本作成、図面作成、スタッフ・出演者との調整）混沌としていた各プログラムのピースが組み合わさっていて



幕開け “中山ゆきこ(るつ子姉長女)と仲間達の三重奏。平和の響き。

き、当日を迎えることになっていくのです。あと10日、あと5日、あと3日、毎日のやり取りはまるで、一人一人からの祈りのようでした。

そして迎えたコンサート当日。舞台裏では最終確認が進みます。あれほど混乱していた準備期間が嘘のように、リハーサルがこなされ、コンサート開始が現実味をおびてきました。特に印象的だったのが、台湾エンター民教会の方々とのやり取りでした。彼らとは言語も文化も異なります。言葉の壁が立ち、技術的な詳細を詰めるのは困難を極めました。しかし、不安や焦りの中にあっても、彼らの純粋な信仰心と奉仕

への意欲は伝わり、言葉を超えた深い絆が生まれました。

私の経験やスキルは、神様がこの日のために用意してくださった「道具」。皆の祈りによって聖霊が働き、神様が共にいてくださると約束してくださったその事実が、形となって証明されていたのです。

しかし尚、最後の最後にまた大きな試練が待っていました。

コンサートを観に来る方々の9割は、同時開催されている国際正義アシュラムの参加者でした。そして、アシュラムのプログラムとコンサートの開演時間が全くリンクしていないというアクシデント。時間通りの開演は不可能であることに気づいたのは、開演1時間前のことでした。

「家長に電話して！ファミリーの時を30分

繰り上げて移動をお願いしてください」「家長の電話、分かりますん！」「え〜!?!」

開演時間が迫るにつれ、楽屋裏は尋常ではないバタバタ感に包まれました。  
(つづく)  
（静岡草深教会・静岡聖書教室主催・早天祈祷会の友）

### 第20回国際正義平和

#### アシュラムの感想 ①

古憶婷

今回で日本のアシュラムに参加するのは3回目になります。振り返るたびに、そこにはイエス様の恵みがあふれていると感じます。

その中で私は、イエス様から「子よ、わたしはここにいます。いつもあなたと共にいます。あなたを愛している」と語りかけられているように感じました。

アシュラムでは、ただ分かち合いやメッセージを聞くだけでなく、年齢や立場に関係なく、すべての人が神様に愛されている大切な存在であることを実感しました。

ヨハネの手紙第一章の分かち合いでは、横山勲牧師が、パウロには三度、神様に祈ってもかなえられなかった願いがあったことを話してくださいました。神様はその祈りを

「家長に電話して！ファミリーの時を30分

榎本恵牧師は、アシュラムは聖書を研究する場ではなく、神様が聖書を通して私たちに何を語っておられる



みんなでアシュラムセンターへ初訪問 (筆者中央)

かなえられませんでした。その代わりに彼の心に深い癒しを与えられました。

その時、私の心にも不思議なほどの平安と温かさ、喜びがあふ

れ、思わず涙が出そうになりました。イエス様が私の人生に語りかけてくださっていると感じたのです。

日々の生活の中で、私は「どうして私の祈りは聞かれないのだろう」「どうして他の人は簡単に得られるのに、私はこんなに苦しいのだろう」と

思うことがありません。時にはあきらめたくなることもあります。それでも、そのような時こそ、パウロと同じように心が癒され、「わたしの力は弱さの中にあってこそ完全に現れる」というイエス様の言葉を少しづつ理解できるようになりました。

日本愛修會心得感想

文蘭教會 古禮婷姊妹

這是我第三次參加日本愛修會，每一次回頭看滿滿都是耶穌的恩典，在愛修會過程中不是只是聽分享及講道，在參與的過程中，不分年紀不分職位每一位都是神所愛的孩子。

在約翰一書第五章的分享中，橫山勳牧師提到保羅有3次上帝沒有成全他的禱告，神雖然沒有成就他的禱告，卻在他的生命中帶來心靈的醫治，那一刻，我心靈突然好平安好溫暖好喜樂甚至好想哭，我知道這是耶穌在對我的生命來說話了，生活中我常常問耶穌，為什麼我的禱告沒有被聽見，為什麼別人輕輕鬆鬆的得著，我卻走得很辛苦，甚至有的時候真的很想放棄，但每次有這樣的想法，我的生命就像保羅的生命一樣得著心靈的醫治，也讓我明白，耶穌所說我的能力在軟弱的人身上顯得最剛強，這就是我在愛修會中與耶穌相遇的時刻。

這三天從聚會、靈修、聖家族分享及日本當地參訪，謝謝耶穌一路的平安慈愛陪伴著我們，過程中看著年長的弟兄姊妹，即便體力有限，卻看得見他們對耶穌的渴望，不斷的提醒我，耶穌是我們的力量，耶穌的愛何等的美妙，這當中非常謝謝日本所有愛修會同工及台灣愛修會同工，非常細心照顧我們一切的所需。

した。これが、アシュラムの中でイエス様と出会った大切な瞬間で

した。(つづく) 台湾基督長老教會 文蘭教會

心を癒してくれた第6回 ユーストリートアシュラム

岩崎 浩二 私は「魂を生き返らせ」「心に喜びを」が今回の聖書箇所の中で最も自分に必要だと感じた。プログラムの中で「恵みの時」という時間がある。「聖書から与えられた恵みや互いの抱えている問題を話し合い、また祈り合い励まし合う」時である。

私は生まれ育った実家の家庭環境で幼児期〜児童期の頃がどうしてもトラウマになっている。普段はこの時期の話をする事はほぼ無い。自分の心の中に押し留めるしかないのだ。しかし、今回は「恵

みの時」の中でそれを分かち合うことができた。それは、奉仕してくださる皆様の「愛」と集う参加者の「誠意」、「信仰が宿る建築」シメオン黙想の家にある「素晴らしい雰囲気」、そして「悲しむ人々は、幸いである、その人たちは慰められる。」と語るイエスの愛が、きっとその場を包み込んで、暖かな「ハーモニー」を醸し出していたからだと思う。

私が桜美林大学生の時に指導いただいたキリスト者のある教授は、授業で一冊の本を紹介していた。神野直彦『分かち合い』の



シメオンでの『恵みの時』

『経済学』岩波書店(2010年)である。その中に次のような文章がある。  
「悲しみを分かち合えば、悲しみに暮れている人は悲しみを癒され、幸福になる。しかも、悲しみを分かち合った人も幸福になる。」<sup>3</sup>  
「恵みの時」はこのような視点からも、「悲しみの癒しの機会」として私には非常に有益



↑加古川祈りの家(フリーメソジスト加古川教会にて5月。小林清子姉の祈り、継がれて。次回は9月5日)



↑東洋一兄の告別式。洋一兄のお人柄を感じる心温まるひととき。孫のちーちゃん(4才)のお祈りも。

だった。  
ちなみに、その教授の言葉で私が実践しているものがある。それは「人から誘われた催しには可能な限り参加しましょう。」である。  
皆様も、是非「アシラム誌」からの催しの誘いに応えてみてはいかがでしょうか、と私は心から思う。  
私は今回のユーストリートから「恵み」と「活力」をもらい、日常生活へ、職場へ戻っていく。その時に「いつも喜び、絶えず祈り、

どんなことにも感謝し、そして、恐れな

い。」<sup>4</sup>を日々の灯の言葉とした。それがきくと、私の魂を生き返らせ、心に喜びをもたらしてくれると信じて。  
(カトリック厚木教会(早天祈祷会の友)(しみじみする会の友)

1 詩編19章8節〜9節の一部抜粋して引用。  
2 マタイによる福音書5章4節から引用。  
3 前述の本の13頁。  
4 テサロニケの信徒への手紙一5章16節〜18節を要約、筆者の課題を加筆。

「去る二月には、ブラジルアシラムに参加させて頂き、感謝しております。しかし、私共の知っている先生方、兄弟姉妹も少なくなって、さびしく感じました。でも大変祝福されました(中略)これからも、アシラムの活動が祝されますように。期待もしております。私も今年12月に88才、妻は5月で85才です。皆様によりしくお伝え下さい。又、サンパウロへ来て下さい。 後藤 槇夫・弥生」 お便り感謝！



←ブラジルアシラムの皆様、暖かいおもてなし、感謝です！大切な祈りの友！

シメオンの風【番外編】「アンナに倣いて」

アシュラムの輪でつながるH姉、N姉、そして不肖私は、この春ポーランドへ旅をしました。目的はウクライナ難民の子どもたちのイースターキャンプでの奉仕でした。日本の各地から、そして、欧州在住の方々も含め集まった総勢26名。平均年齢39歳。30歳以下が全体の6割を占める年齢構成。そのなかの我ら3名70代は、チームの若い人たちの行動力、忍耐力、瞬発力、現実から学ぼうとする姿勢、子どもたちへそそぐ愛の眼差し、熱心で純粋な信仰に圧倒されっぱなしでした。日本の若いクリスチャンの未来に希望がみえました。

チームメンバーからはマダムと呼ばれた私たちも、彼らの働きを遠くから眺めるのではなく、ともにこの渦中で一緒に動かなければなりません。元気な子どもたちと共に捧げる朝の礼拝は、最初に4曲ほど讃美に合わせたヒップホップダンスからスタート。私たちも見よう見まねで老体にむち打ち、踊りました。くたびれたところは見せられないと、日々足腰に湿布を張って頑張りました。

この旅で、70代の私たちは若い人たちから多くの刺激とサポートを受けました。同世代だけだと自分の今を見失いがちです。しかし、若い彼らの中に自分を置いてみると、高齢の自分に出来ることは何かと問われ、それは84歳の預言者アンナのように祈り続けることだと示されました。(ルカ：2章36-37参照) 年を重ねたことで、知りえた主の深い計らい、与えられた主の祝福に確信をもって祈る恵みを与えられているのだと。子どもたちのために行った旅でしたが、逆にこれからの自分にできる事を主から与えられた旅となりました。

市橋 恵子



↑樋口英子さんのリフォームによるウクライナカラーのハッピーをキャンプのスタッフへプレゼントしました。



↑ワルシャワ旧市街を散策するアシュラムのマダム3名。

いえじま 雑記 35 「沖縄巡礼の旅を待ちつつ」

梅雨にはいったというのに雨は数日降っただけで、夏のような快晴が続いている伊江島です。五月はお客さんがひっきりなしに訪れてきて、慌ただしく過ごしています。昨日は久しぶりに家族五人だけになる午後があり、サンドイッチとおにぎりをもってビーチに行ってきました。潮がずいぶん引いていて、遠くのほうまで歩いていけそうな海のそばの砂浜で、子どもたちは飽きもせずずっと遊んでいました。

アイスキャンディーを食べて一休みしたら、こんどは島の北側の展望台へ。西の海にゆっくりと、大きな夕陽が落ちていきます。夕陽が完全に沈んでしまうと、一番星が光っているのが見えて、僕らは帰路へとつきます。車が家のまえに停まるころ、あたりはすっかり暗くなっていました。腹ペコになったぼくたちが車から我先にと降りようとしていたら、後部座席にいた三女が一言、ぞうりが無い。どうやら展望台にぞうりを忘れてきたようです。前にもこんなことがあったようなと思いつつ、展望台まで戻ると、真っ暗闇のなかに綺麗に並んだぞうりが、車のライトに照らされて見えました。無事、ぞうりを取り戻した三女は、ぞうり冷たくなっていると嬉しそう。そうしてきた道を引き返したのです。

そんなぼくらですが、六月は皆様をこの島でお待ちしております。

榎本 空 (ノースカロライナ大学院生、翻訳家、沖縄伊江島在住)



⑤(空)5才のしりとりに  
④は、じゃこで  
した

あとがき

あれほど「寒い、寒い」と言っていた日々が、まるで嘘であったかのように、季節は早くも夏の気配を帯び始めている。沖縄でも、すでに梅雨明けを思わせるような青空の日々が続いている。

月に一度、沖縄のサマリヤ人病院で働き始めてから、三年が経った。そのような中、今年三月に起こった同志社国際高校修学旅行中の痛ましい事故のことが、今も深く心に残っている。私自身、同志社神学部で学び、同志社国際高校が創設されたごく初期には、伊江島研修の手伝いにも関わってきた。また、亡くなられた牧師も、同労者として長く親しくしてきた方であった。

それだけに、今回の出来事について、ご遺族の深い悲しみ、そしてその後次々と明らかになっていく杜撰な事実に触れるたび、言葉を失う思いがする。

しかし同時に、この出来事について、沖縄の平和の問題として、またキリスト者として、ただ沈黙したままでは、これは許されないと感じている。いつの日か、このことについて、自らの言葉で、祈りをもって語る時を持たなければならぬ。そのような思いを深くしている。今年20日には、恒例の糸洲・第二外科壕前での慰霊祭が行われる。八十一年前の沖縄戦の犠牲者を憶えることは、決して過去を振り返るだけではない。いまこの時代に起こっている痛ましい出来事——辺野古での事故をも、同時に胸に刻むことなのだと思う。

戦争の傷跡も、現代に生きる人々の痛みも、決して別々のものではない。その苦しみのただ中で、なお祈り続けること。小さくとも、平和を求め続けること。その務めを、私たちは改めて問われているのではないだろうか。(恵)



あなたは道のために、使に命じて、守らせしてくださる。

詩編 九一・一  
ニヒ一・六・九  
榎本和子


中止、又はオンラインに変更もあり。  
ホームページ、電話等でご確認下さい。直前の変更の場合あり！

【主な問い合わせ先】0748-33-4030 アシュラムセンター  
【Zoom・インターネット等 問い合わせ先】080-3983-8140

6月の聖書教室など

5(金)	阪神ミニアシュラム (神戸聖愛教会 PM1:00)
8(月)	福岡聖書教室 (福岡中部教会 PM1:30)
14(日)	ちいろば牧師記念チャペル夕礼拝 (PM5:00)
18(木)	沖縄聖書教室 (那覇バプテスト教会 PM6:00~9:00)(愛餐会あり。会費制)
22(月)	静岡聖書教室 (旧・英和女学院宣教師館 AM10:00、PM1:30)
23(火)	東京聖書教室 (御茶ノ水クリスチャンセンター 4F AM10:30)
23(火)	しみじみする会 (桜美林大学 荊冠堂チャペル PM2:30)
7/3(金)	阪神ミニアシュラム (神戸聖愛教会 PM1:00)

6月のアシュラムなど

6(土)	第30回 三重一日アシュラム 近畿福音津ルーテル教会 奉仕者 榎本 恵師	0748-33-4030 アシュラムセンター
〈沖縄巡礼の旅 2026〉		
18(木)	◆那覇空港集合 (13時) ◆サマリア人病院での交わり ◆沖縄聖書教室 (那覇バプテスト教会 PM6:00~9:00、愛餐会有) 沖縄の皆様も是非ご参加下さい！(会費2,000円)	
19(金)	◆伊江島へ (わびあいの里、城山、ビーチなど)	
20(土)	◆糸満へ (沖縄の皆様と) 第2外科壕跡にて慰霊祭	
21(日)	◆よきサマリア人伝道所 主日礼拝 解散 (13時)	

7月のアシュラム予定

20(月・祝)	第29回 福岡一日アシュラム 奉仕者 榎本 恵師	0748-33-4030 アシュラムセンター
---------	-----------------------------	---------------------------

8月以降のアシュラム予定

8/19(金)~20(木)	第2回 子どもアシュラム
9/11(金)~12(土)	第49回 新潟アシュラム
9/20(日)~21(月・祝)	第57回 九州アシュラム (アシュラム連盟)
9/22(火)	第33回 岐阜アシュラム
9/24(木)~25(金)	第14回 日光オリブの里アシュラム
9/26(土)	第52回 南町田一日アシュラム
10/5(月)	第50回 山陰アシュラム
10/12(月)~14(水)	第51回 加太アシュラム
10/31(土)	第7回 水戸バプテスト教会アシュラム
11/2(月)	第51回 京浜アシュラム
11/28(土)	第7回 四国一日アシュラム

—アシュラム誌 配送遅れお詫び申し上げます—  
配送会社のシステム変更に伴い、仕分け作業 (今まではアシュラム村担当) に時間がかかり…との事。  
対策検討中。本誌をお待ち下さる皆様に感謝！

みことば



和子母部屋の  
前庭にて

京都大学名誉教授  
アシュラムセンター研究員  
河崎靖

スタンリー・ジョーンズと  
クリスチャンアシュラム運動③

このキリストにインドの人々が関心を示したことは、彼の著書『インディアン・ロードのキリスト Along the Indian Road』(1925年出版)の中で示されている。ジョーンズにとって、宣教の現場で大切なのは、決してキリスト教の優越性ではなく、キリストの全能性・充足性こそであり、その後のジョーンズのキリスト教宣教の基盤となっている。

A highly civilized, and to me a highly Christian, method was evolved and applied by Mahatma Gandhi when he said: "You need not sit down under wrong, nor need you go to war - refuse to cooperate with the wrong, take on yourself suffering, resist with weapons of infinite patience, go to jail en masse, match against physical weapons the weapons of soul forces conquer by a cross."

『ガンディーが次のように語った時、そこにはきわめて文明的で私にとっては非常にキリスト教的な方法が生み出され実践されていた:「不正に対して黙って従う必要はない。しかし、戦争をする必要もない。不正に協力することを拒みなさい。苦しみは自ら引き受けなさい。無限の忍耐という武器で抵抗しなさい。集団で投獄されることも辞さず、物理的な武器に対して魂の力という武器をもって立ち向かいなさい。魂の力は十字架によって勝利するのです』

ジョーンズがインドの人々と対話する際とった態度は、信仰が実生活の中でどういう役割を果たしているのかの確認であり、彼は対話相手に「信仰を通して見つけたことを教えて下さい。日常生活で信仰はどのような役に立っていますか」と尋ねるのであった。このために逆に生じるリスクにも備える必要があるわけである。つまり、非キリスト教徒に対してこのような問いかけをする以上、私たちキリスト教徒もこちらの手の内をすべて曝け出さねばならない。どんな状況でも切り札はイエス・キリストである。

ジョーンズがこうした対話をなしていたのは実に100年くらい前のことであり、今日でこそ重要であるとされている非キリスト教徒との対話をこれほど早い時期に始めていたことは大いに賞賛に値することなのである。



「早天祈禱会にて誕生者への祈り」尾崎恵姉・池谷治朗兄の祈りによって、早天祈禱会がこのような形(Zoom可)になったことをおぼえております。一人一人がアミナディブの車に、気づいたら乗せられていた…そのような者として、神の恩寵に生きる事ができますように。雅歌6(尾崎幹二兄の誕生日に)